

マッチングと条件文・譲歩文の伝達情報

酒 井 智 宏

1. はじめに

英米の言語理論とは独立に開発されたフランス語学独自の理論として、言語内論証理論がある（例えば Anscombe & Ducrot 1983 参照）。これは、言語の記述に心的表象や指示対象といった概念を用いず、ある表現 A を論拠として結論 B が正当化されるとき、「B を正当化するために使用される」という事実を表現 A の意味とする立場である。すなわち、A の意味は B に依存して決定され、大久保（2000：25）の言うように、「単文レベルの文が独立した意味を持っているとは考えず、これらの意味はつねに、その前後との意味的連関によって決定される」ことになる。喜田（1999：14）はそうした立場から言語表現の「使用」こそ「意味」である」と述べている。例えば、病人であるピエールについて語った文である（1a）と（1b）は、客観的には同じ事態を表しているが、正当化される結論は正反対であり、（1a）が（2a）を正当化する文脈では、（1b）は（2b）を正当化することができるのに対して、（2a）を正当化するのは困難である（喜田 1999）。

(1) a. Pierre a un peu mangé. (ピエールは少し食べた。)

b. Pierre a peu mangé. (ピエールはほとんど食べなかった。)

(2) a. Sa femme sera contente. (彼の妻は喜ぶだろう。)

b. Sa femme sera inquiète. (彼の妻は心配するだろう。)

このことから、言語内論証理論では、言語の表す客観的事態とは独立に、論証の概念が必要であると考えられる。喜田（1999, 2000）はこの立場からフランス語の条件文 Si P, Q (「P ならば Q」) の分析を行っている。そこでは、Si P, Q を一つ

のかたまりと見なし、Si P, Q という形式が持つ論証性を考慮して初めて条件文の意味論が正しく記述できると主張されている。

この論文では、喜田の主張に反して、自然言語の分析に、「論拠」「結論」といった論証的概念だけでなく、何らかの実質的な表象レベルが必要であることを示す¹⁾。そして、心的表示レベルを用いる言語理論であるメンタル・スペース理論 (Fauconnier 1984, 1997, Fauconnier & Turner 2002) の枠組みで条件文および譲歩文の意味論を定式化し、論証概念によらなくとも喜田の観察する言語事実が導き出せることを示す²⁾。

2. 喜田 (1999, 2000) の言語内論証理論による分析とその問題点

2.1 喜田 (1999, 2000) の分析

喜田 (1999, 2000) は、言語内論証理論の枠組みで、Si P, Q を一つのかたまりと見なし、Si P, Q が正当化できる結論 R は次の3つのいずれかであると述べている³⁾。

結論 (i) R は Q が正当化する結論に等しい。

- (3) S'il fait beau demain, Pierre passera à la maison. Donc je vais aller faire des courses pour le déjeuner demain. (明日晴れたらピエールが来る。だから食材の買い物に行こう。)

(3) の結論「食材の買い物に行こう」は後件「ピエールが来る」が正当化する結論に等しい。

結論 (ii) (a) Q が望ましいことであれば、R は P の成立が望ましいことを示

1) この論文は日本フランス語フランス文学会 2005 年度春季大会 (2005 年 5 月 29 日, 立教大学) における口頭発表に基づいている。また, 第 2 節の内容は Sakai (2006) と重複する。

2) ただし, 本論文は言語の分析に論証概念が不要であることを示すものではない。

3) 論点を明確にするために喜田 (1999, 2000) の例文を適宜修正してあるが, この修正は喜田の論点を損ねるものではない。

唆する内容となる。(b) Qが望ましくないことであれば, RはPの成立が望ましくないことを示唆する内容となる。

(4) a. Si tu travailles assez, tu l'auras. Donc il faut que tu prépares bien.

(しっかり勉強すれば受かるよ。だから勉強しなさい。)

b. Si elle rentre après dix heures, elle sera punie. Donc il ne faut pas qu'elle rentre après dix heures.

(彼女は午後10時を過ぎて帰るとお仕置きされる。だから10時を過ぎて帰ってはいけない。)

結論 (iii) Rはsi P, Qを一言で要約したものに相当する。

(5) Si je bois du lait, je suis malade. Donc je suis allergique au lait.

(私は牛乳を飲むと気分が悪くなる。だから私は牛乳アレルギーだ。)

喜田(1999)は, この分析により, フロイトの『機知の言葉』の中の対話(6)に見られるある種のずれが説明できると主張する。

(6) Si vous prenez ce cheval et si vous vous mettez en route à quatre heures du matin, vous serez à six heures et demie à Presbourg. -Et qu'est-ce que j'irais faire à Presbourg à six heures et demie du matin ?

(この馬を買って朝の4時に出発すれば, 6時半にはプレスブルグに着きますよ。

——朝の6時半にプレスブルグに行っていったい何をするんだい。)

商人の念頭にあるのは結論(iii)「これは速い馬だ」であるが, 客は結論(i)「6時半にプレスブルグに着いて何をするのか」を問題にしており, そこにずれが見られる。このずれは論証概念を導入することにより狭義の言語学の枠内で適切に説明される, と喜田は主張する。

2.2 喜田(1999, 2000)の問題点

2.2.1 結論1・2と結論3の性質の相違

喜田の分析の第一の問題は, 結論1・2と結論3とで性質が異なるという事実を説明できないことである⁴⁾。両者の間には少なくとも四つの相違が観察さ

4) 喜田(1999)は結論(i-ii)が一方向的であるのに対して, 結論(iii)は双方向的

れる。

第一に、話者が結論 (i-ii) にコミットしない文脈を考えることはできるが、結論 (iii) には常にコミットしていなければならない。

(7) A : Pierre, qu'est-ce qu'il va faire demain ? (ピエールは明日何してるのかな。)

B : S'il fait beau, il passera à la maison. (晴れたらうちに来ることになってるよ。)

(7B) はピエールのスケジュールを A に教えることが目的であり、ピエールがうちに来た場合に何をするかを考えている必要はない。すなわち、(7B) は結論 (i) にコミットしていなくてもよい。

(8) A : Est-ce que cet examen est difficile ? (その試験、難しいかな。)

B : Non, il n'est pas difficile. Même Pierre peut l'avoir s'il travaille.

(いや、難しくないよ。ピエールでも勉強すれば受かるよ。)

(8B) は試験が簡単であることを A に伝えることが目的であり、「ピエールは勉強するべきだ」という結論 (ii) にコミットせずに発話することができる。同様に、(9B) は彼女の両親が厳しいことを伝えるのが目的であり、彼女が早く帰宅するべきだと話者が考えている必要はない。

(9) A : Comment sont ses parents ? (彼女の両親ってどんな人たち?)

B : Ils sont sévères. Par exemple, si elle rentre tard, elle est punie.

(厳しいよ。遅く帰ったりしたら、お仕置きされるよ。)

これに対して、(10B) は「牛乳アレルギーだ」という結論 (iii) にコミットしている必要がある。(10B) が伝えたいのは「牛乳を飲むわけにはいかない」という結論 (ii) であるが、それにもかかわらず、「牛乳アレルギーだ」という結論 (iii) を否定すると矛盾が生じる。

(10) A : Veux-tu prendre du lait ? (牛乳飲む?)

B : Non merci. Si je bois du lait, je suis malade.

(いや、牛乳を飲むと気分が悪くなるんだ。)

であるという相違を指摘し、donc (「だから」「つまり」) を用いて条件文と結論 X を結合した場合、結論 (iii) に相当する X の場合に限り、Si P, Q. Donc X. に加えて、X. Donc si P, Q. が可能であると述べている。しかし、以下で論じるように、結論 (i-ii) と結論 (iii) の相違はそれだけではない。

第二に、結論 (iii) を却下する場合には別の結論 (iii) が成立することをその根拠にする必要があるが、結論 (i-ii) を却下する場合には別の結論 (i-ii) を根拠とする必要はない。

(11) A : Regarde ce temps splendide. S'il fait beau demain, Pierre passera à la maison.

Donc je vais aller faire des courses pour le déjeuner demain.

(いい天気だね。明日晴れたらピエールが来るんだ。だからこれから明日の昼のための買い物に行かないと。)

B : Ce n'est pas la peine. Regarde ce nuage noir là-bas. Il va pleuvoir.

(その必要はないよ。あの黒い雲を見なよ。雨が降るよ。)

(11B) は「雨が降る」という事実を根拠に (11A) の結論 (i) を却下しているが、「雨が降る」は (11A) の条件文 (「明日晴れたらピエールが来る」) の結論 (i) ではない。次も同様である。

(12) A : Si tu travailles assez, tu réussiras à cet examen. Donc il faut que tu travailles.

(しっかり勉強すればその試験には受かるよ。だから勉強しないとね。)

B : Non. Ce n'est pas la peine que je travaille pour un diplôme qui ne sert à rien.

(いや、受かっても役に立たない試験だから、その必要はないよ。)

(13) A : Si elle rentre tard, elle sera punie. Donc il ne faut pas qu'elle rentre tard.

(彼女は遅く帰ったらお仕置きされる。早く帰らないとね。)

B : Mais non. Ça lui est égal de se faire punir. Elle se moque des punitions. Donc ce n'est pas grave si elle rentre tard.

(いや、お仕置きされたっていいんだよ。彼女はそんなこと気にしないから。遅く帰ったって平気さ。)

(12B) は A の条件文の後件 (「受かる」) が望ましいことを否定することにより結論 (ii) を却下し、(13B) は A の条件文の後件 (「お仕置きされる」) が望ましくないことを否定することにより結論 (ii) を却下しているが、別の結論 (ii) を主張しているわけではない。これに対して、(14B-15B) は A の結論 (iii) とは別の結論 (iii) を提案することにより A の結論 (iii) を却下している。

(14) A : Si je bois du lait, je suis malade. Donc je suis allergique au lait.

(牛乳を飲むと気分が悪くなるんだ。牛乳アレルギーだな。)

B : Non, ce n'est pas possible que tu sois allergique au lait. Tu as une maladie d'estomac.

(いや、牛乳アレルギーってことはないよ。胃が悪いんだよ。)

(15) A : Même Pierre peut réussir à cet examen s'il travaille. Donc il n'est pas si difficile que ça.

(その試験はピエールでも勉強すれば受かる。そんなに難しくないうってことだな。)

B : Si, il est difficile. Pierre l'aura parce qu'il est très intelligent.

(いや、難しいよ。ピエールは頭がいいから受かるんだ。)

第三に、(16-20) が示すように結論 (iii) だけが pourquoi (「なぜ」) に対する答えとなる⁵⁾。

(16) A : S'il fait beau demain, Pierre passera à la maison. (明日晴れたらピエールが来る。)

B : Pourquoi? (どうして?)

A : #Parce que je vais aller faire des courses pour le déjeuner demain. [結論 (i)]

(私が明日の食材の買い物に行くからだよ。)

(17) A : Si tu travailles assez, tu réussiras à cet examen. (しっかり勉強すれば受かるよ。)

B : Pourquoi? (どうして?)

A : #Parce qu'il faut que tu prépares bien. [結論 (ii)]

(しっかり勉強しないといけないからだよ。)

(18) A : Si elle rentre après dix heures, elle sera punie.

(彼女は夜 10 時過ぎに帰ったらお仕置きされる。)

B : Pourquoi? (どうして?)

A : #Parce qu'il ne faut pas qu'elle rentre après dix heures. [結論 (ii)]

(10 時過ぎに帰ってはいけないからだよ。)

5) 以下では、例文に付された # は当該文脈においてその発話が不自然であることを表す。無印の例文はその発話が自然であることを表すが、自然であることを特に強調する場合には「OK」を付している。

(19) A : Si je bois du lait, je suis malade. (牛乳を飲むと気分が悪くなる。)

B : Pourquoi? (どうして?)

A : OK Parce que [je suis allergique au lait / j'ai une maladie d'estomac]. [結論 (iii)]

(牛乳アレルギーだからだよ。/ 胃が悪いからだよ。)

(20) A : Si tu travailles assez, tu réussiras à cet examen. (しっかり勉強すれば受かるよ。)

B : Pourquoi? (どうして?)

A : OK Parce que [il n'est pas si difficile que ça / tu es intelligent]. [結論 (iii)]

(そんなに難しい試験ではないからだよ。/ 君は頭がいいから。)

第四に、自明の理を表す条件文(分析的条件文)に対しては、結論(i-ii)は存在するが、結論(iii)は存在しない。分析的条件文として、Si tu [dessines / as dessiné] un chat, tu [dessines / as dessiné] un mammifère (「猫を[描けば/描いたのなら]、哺乳類を描いたことになる」)を例にとる。次の文脈を考えよう。学校で「哺乳類の絵を描く」という課題が出た。小学生ピエールは猫の絵を描くのが好きだが、猫が哺乳類であることは知らない。ピエールの親は正しく哺乳類の絵が描けたらご褒美を出すことを約束している。このとき、(21-22)の下線部はそれぞれ結論(i)、結論(ii)である。

(21) ピエール : J'ai dessiné un chat. (猫を描いたよ。)

ピエールの親 : Si tu as dessiné un chat, tu as dessiné un mammifère. Voilà ta récompense.

(猫を描いたのなら、哺乳類を描いたことになるよ。ご褒美をあげよう。)

(22) ピエールの親 : Si tu dessines un chat, tu dessines un mammifère. Donc tu n'as qu'à dessiner un chat comme d'habitude.

(猫を描けば哺乳類を描いたことになる。だから、いつもどおり猫を描けばいいんだよ。)

一方、この条件文に対して結論(iii)に相当する発話を考えることはできない。

以上から、結論(i-ii)と結論(iii)とでは性質が大きく異なることが分かるが、喜田の分析ではこの相違を説明することができない。

2.2.2 結論 (iii) は要約か

もしも喜田の言うように結論 (iii) が Si P, Q を一言で要約したものならば、結論 (iii) と Si P, Q は等価な内容を持つはずである。しかし、例文 (5) に見られる「牛乳を飲むと気分が悪くなる」という命題と「牛乳アレルギーだ」という命題は等価ではない。前者はアレルギー症状であるが⁵、アレルギー症状はアレルギーの結果として起こるのであり、その逆ではない。この非対称性は言語事実にも反映される。結論 (iii) を R とおくと、*parce que* (英語 *because*) は双方向の結合を許容し、《R *parce que* si P, Q》(R *because* if P, Q) と《Si P, Q *parce que* R》(If P, Q *because* R) はいずれも可能であるが、*Je dis que* (I say that) や *On dirait que* (One would say that) と共起するのは前者だけである。

- (23) R = 「牛乳アレルギーだ」, P = 「牛乳を飲む」, Q = 「気分が悪くなる」
- (OK *Je dis que* / OK *On dirait que*) *je suis allergique au lait, parce que si je bois du lait, je suis malade.*
(I say that / One would say that) R *because* if P, Q. ((24a-25a) も同様)
 - (#*Je dis que* / #*On dirait que*) *si je bois du lait, je suis malade, parce que je suis allergique au lait.*
(I say that / One would say that) if P, Q *because* R. ((24b-25b) も同様)
- (24) R = 「頭がよい」, P = 「勉強する」, Q = 「すべての試験に受かる」
- (OK *Je dis que* / OK *On dirait que*) *il est très intelligent, parce que s'il travaille, il réussit à tous ses examens.*
 - (#*Je dis que* / #*On dirait que*) *s'il travaille, il réussit à tous ses examens, parce qu'il est très intelligent.*
- (25) R = 「親が厳しい」, P = 「10時過ぎに帰る」, Q = 「お仕置きされる」
- (OK *Je dis que* / OK *On dirait que*) *ses parents sont sévères, parce que si elle rentre après dix heures, elle est punie.*
 - (#*Je dis que* / #*On dirait que*) *si elle rentre après dix heures, elle est punie, parce que ses parents sont sévères.*

また、*Comment tu le sais?* 「どうして分かる?」に対する答えとなるのは Si P, Q のみである⁶⁾。

- (26) A : Je suis allergique au lait. (牛乳アレルギーだ。)
 B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)
 A : OK Parce que si je bois du lait, je suis malade. (牛乳を飲むと気分が悪くなるんだ。)
- (27) A : Si je bois du lait, je suis malade. (牛乳を飲むと気分が悪くなる。)
 B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)
 A : #Parce que je suis allergique au lait. (牛乳アレルギーなんだ。)
- (28) A : Il est très intelligent. (彼は頭がいいね。)
 B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)
 A : OK Parce que s'il travaille, il réussit à tous ses examens.
 (勉強すればどんな試験にも受かるんだ。)
- (29) A : S'il travaille, il réussit à tous ses examens.
 (彼は勉強すればどんな試験にも受かる。)
 B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)
 A : #Parce qu'il est très intelligent. (彼は頭がいいんだ。)

6) 一般に、

A : P.

B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)

A : P と判断する根拠 (= P の結果だと考えない限り説明が困難な事実)
 という談話は自然であるが、

A : P の結果

B : Comment tu le sais ?

A : P の原因

という談話は不自然になる。

(i) A : Je suis allergique aux pollens. (花粉症だ。)

B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)

A : OK Parce que ces mois-ci j'arrête pas d'éternuer. (最近くしゃみが止まらないんだ。)

(ii) A : J'arrête pas d'éternuer. (くしゃみが止まらない。)

B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)

A : #Parce que je suis allergique aux pollens. (花粉症なんだ。)

- (30) A : Ses parents sont sévères. (彼女の両親は厳しいね。)
 B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)
 A : OK Parce que si elle rentre après dix heures, elle est punie.

(彼女は 10 時過ぎに帰ったらお仕置きされるんだ。)

- (31) A : Si elle rentre après dix heures, elle est punie.

(彼女は 10 時過ぎに帰ったらお仕置きされる。)

B : Comment tu le sais ? (どうして分かる?)

A : #Parce que ses parents sont sévères. (彼女の両親は厳しいんだ。)

さらに, (32-34) が示すように, 条件文と結論 (iii) の非対称性は日本語にも見られる⁷⁾。

- (32) a. OK 牛乳を飲むと気分が悪くなるということは, 牛乳アレルギーである
 と考えるしかない。
 b. # 牛乳アレルギーであるということは, 牛乳を飲むと気分が悪くなる
 と考えるしかない。
- (33) a. OK 彼が勉強したらどんな試験にも受かるということは, 彼が優秀で
 あると考えるしかない。
 b. # 彼が優秀であるということは, 彼が勉強したらどんな試験にも受か
 ると考えるしかない。
- (34) a. OK 彼女が夜 10 時過ぎに帰宅したらお仕置きをされるとことは,
 彼女の両親が厳しいと考えるしかない。
 b. # 彼女の両親が厳しいということは, 彼女が夜 10 時過ぎに帰宅したら
 お仕置きをされると考えるしかない。

以上の事実から, 結論 (iii) は条件文の要約ではなく, 原因命題であると考
 えられる。

7) 一般に, (i) は自然であるが, (ii) は不自然である。

(i) OK [結果] ということは, [原因] と考えるしかない。

(ii) # [原因] ということは, [結果] と考えるしかない。

(iii) OK くしゃみが止まらないということは, 花粉症であるとするしかない。

(iv) # 花粉症であるということは, くしゃみが止まらないと考えるしかない。

2.2.3 譲歩文

これまでは条件文 $si\ P, Q$ を考えてきたが、今度はそれに対応する譲歩文 $Même\ si\ P, \neg Q$ が正当化する結論を考えてみよう⁸⁾。喜田 (1999, 2000) が条件文に対して結論 (i-iii) を考えたのにならって、譲歩文に対して結論 (i'-iii') を考えると、次のようになる。

結論 (i)' : 条件文と同様に、後件 $\neg Q$ が正当化する結論と同様のものが結論となる。

結論 (ii)' : (a) 条件文と異なり、 $\neg Q$ が望ましいときは、*Il est possible que P* (「P が可能である」) といった内容が結論となる。(b) $\neg Q$ が望ましくないときは、*Ce n'est pas la peine que P* (「P である必要はない」) といった内容が結論となる⁹⁾。これらを一つにまとめると、 $Même\ si\ P, \neg Q$ は「P の成立は任意である」という結論を正当化する。

結論 (iii)' : 条件文と同様に、 $Même\ si\ P, \neg Q$ 全体を要約した内容が結論となるが、その内容は常に条件文の結論 (iii) の否定である。

結論 (i'-iii') の例はそれぞれ (35-37) である。

(35) *Même s'il fait beau demain, Pierre ne passera pas à la maison. Donc inutile d'aller faire des courses aujourd'hui.* (明日晴れてもピエールは来ない。だから今日食材の買い物に行く必要はない。)

(36) a. *Même si elle rentre tard, elle ne sera pas punie. Donc elle peut rentrer tard.*
(彼女は遅く帰ってもお仕置きされない。だから遅く帰っても問題ない。)

8) 一般に、 $\neg\phi$ は ϕ の否定を表す。

9) 第 3.3 節で見るように、この一般化は不正確であり、正確には次のようになる。

- (i) P が労力を要するものであれば、*Ce n'est pas la peine que P* 「P である必要はない」 (= *C'est possible que $\neg P$* 「 $\neg P$ が可能である」) が結論となる。
(ii) $\neg P$ が労力を要するものであれば、*Ce n'est pas la peine que $\neg P$* 「 $\neg P$ である必要はない」 (= *C'est possible que P* 「P が可能である」) が結論となる。

b. Même s'il travaille, il ne réussira pas à cet examen. Donc ce n'est pas la peine qu'il travaille. (彼は勉強しても受からないだろう。だから無理に勉強する必要はない。)

(37) Même si je bois du lait, je ne suis pas malade. Donc je ne suis pas allergique au lait.

(私は牛乳を飲んでも気分が悪くならない。だから牛乳アレルギーではない。)

喜田の枠組みでは、譲歩文が結論 (i-iii) を持つという事実は譲歩文に関する公理として措定するしかない。したがって、条件文と譲歩文の伝達情報の異同とその理由に関する原理的な説明を行うことは不可能である。

2.2.4 言語の種類および言語習得

喜田 (1999, 2000) の分析では、結論 (i-iii) を正当化するという事実がフランス語の条件文 Si P, Q を定義し、条件文固有の意味から結論 (i-iii) が導き出されるとは考えない。結論 (i-iii) は互いに論理的に独立であるから、喜田の枠組みでは、フランス語が (38g) のタイプの言語であることは単なる偶然であり、(38a-f) のような言語の存在も原理上は排除されないことになる。

(38) a. 条件文が結論 (i) のみと結び付けらる。

b. 条件文が結論 (ii) のみと結び付けられる。

c. 条件文が結論 (iii) のみと結び付けられる。

d. 条件文が結論 (i) および (ii) のみと結び付けられる。

e. 条件文が結論 (i) および (iii) のみと結び付けられる。

f. 条件文が結論 (ii) および (iii) のみと結び付けられる。

g. 条件文が結論 (i) および (ii) および (iii) と結び付けられる。

ここから、少なくとも次の四つの問題が生じる。第一に、喜田の枠組みでは、(38) に関して世界の言語に分布の偏りが見られるならば、その理由を説明する必要がある。これまで見てきたフランス語の例とその日本語訳が示すように、フランス語と日本語は (38g) に属するが、これが偶然の一致であるとは考えにくい。第二に、喜田の枠組みでは、第一言語であれ、第二言語であれ、言語を習得する際には、当該言語が (38) のどのタイプに該当するかを知る必要があり、条件文が伝達する結論を個別にすべて習得した時点で初めて条件形

式の「意味」を習得したことになる。ところが、例えば、フランス語の辞書の *si* の項に結論 (i-iii) の記述はなく、これらの結論を習得することが条件文の意味を習得することであるとは考えにくい。第三に、喜田の枠組みでは、条件文が結論 (i-iii) を持つことはいわば条件文の辞書の意味であることになるが、この考え方では、これまで見てきた通常の条件文と、(39) のような明らかに構文化した条件文を区別することができない。

(39) a. Si on allait au cinéma ?

Lit: If we went to the movies ?

「映画に行かない?」(勧誘)

b. Si j'avais su !

Lit: If I had known !

「(あのとき) 分かっていたら……」(後悔)

(39) のような条件文とその意味はフランス語の構文イデオムとして心的辞書に登録される必要があるが、通常の条件文の結論 (i-iii) を心的辞書に登録する必要があるかどうかは微妙である。実際、第3節で示すように、結論 (i-iii) は単一のスキーマから計算により導き出すことができる。第四に、喜田の枠組みでは、例えば日本語の条件文 (40a) と (40b) が持つ「君は辞職すべきだ」という義務の意味はいずれも結論 (ii) として処理されることになるが、これだけでは、(40a) が対応する譲歩文 (41a) を持つのに対し、(40b) に対応する譲歩文 (41b) が存在しないことは説明できない。

(40) a. 君が辞職しなければ、困る人がいるんだ。

b. 君は辞職しなければ [だめだ / ならない / いけない]。 (cf. Fujii 2004)

(41) a. 君が辞職しなくても、困る人はいない。

b. 君 [は/が] 辞職しなくても [?だめではない/*なる / ??いける]。

以上の問題に対して、本論文では次の立場を取る。結論 (i-iii) は条件文の言語の意味ではなく、条件文の言語的意味から推論により導き出される情報である。これに対して、(39) や (40b) の条件形式はその意味とともに辞書に登録される必要がある。すなわち、通常の条件文が持つ結論 (i-iii) は言語の演算レベルにおいて生み出される情報であり、(39) や (40b) のような定型句とし

ての条件文が持つ意味は語彙部門に書き込まれている情報である¹⁰⁾。言語の演算機構が言語普遍的であり、語彙項目が個別言語に固有なものであるとすると、すべての言語の統語的な条件文は結論 (i-iii) を持ち、(38a-f) のような言語は存在しないと予測される。また、(39) や (40b) のような定型句が存在するかどうかは個別言語のレキシコンに依存し、同一言語内でも、(40b) に対して (41b) のような形式が存在するとは限らないと予測される。次節では、統語的条件文が結論 (i-iii) を生み出すメカニズムを考察する。

3. メンタル・スペース理論による説明

3.1 条件文における暗黙の前提と譲歩文

以下の分析では、条件文と譲歩文の関係について坂原 (1985) の考え方を援用する¹¹⁾。それによると、Si P, Q における P は、Q の十分条件をなす命題集合 E0 に含まれる最も言及価値の高い命題に過ぎず、それ自体では Q の十分条件ではない。E0 に含まれる P 以外の命題が偽ならば、Si P, Q はもはや成り立たず、Même si P, \neg Q という譲歩文が生まれる¹²⁾。P = 「21 歳以上である」、Q = 「この映画館に入れる」、「お金を持っている」 \in E0 とすると、次のような条件文と譲歩文が考えられる。

(42) a. Si tu as plus de 20 ans, tu peux entrer dans ce cinéma.

(君が 21 歳以上なら、この映画館に入れる。)

b. Même si tu as plus de 20 ans, tu ne peux pas entrer dans ce cinéma, parce que tu

10) より正確に言えば、(39-40b) は条件文が持つある種の語用論的含意が語用論的強化によって条件形式の語彙的意味に組み込まれたケースである。

11) ただし以下の記述では、便宜上、坂原 (1985) の表記法を若干変更してある。

12) これを図式化すると次のようになる。 $E0 \rightarrow Q$ かつ $E0 = E \cup |P|$ とすると、 $E \rightarrow (P \rightarrow Q)$ が成り立つ。ここで、E が真ならば、 $E \rightarrow (P \rightarrow Q)$ と $P \rightarrow Q$ は同値となる。すなわち、 $E \rightarrow [E \rightarrow (P \rightarrow Q) \Leftrightarrow P \rightarrow Q]$ は恒真式となる。このため、E が自明である文脈では、Si P, Q と発話することが、 $E0 \rightarrow Q$ と発話するのと同様の情報を与える。

n'as pas un sou.

(君が21歳以上でも、お金を持っていない以上は、この映画館には入れない。)

3.2 条件文

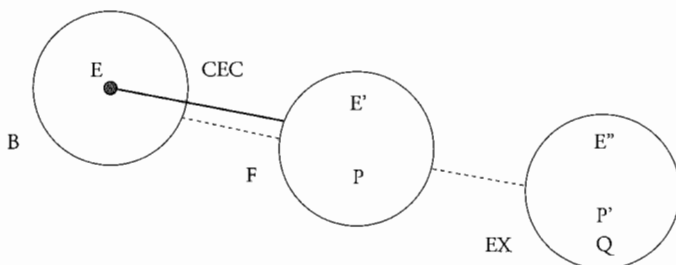
3.2.1 マッチング

メンタル・スペース理論 (Fauconnier 1997) では、 S_i P, Q が基底スペース B に対し、基礎スペース F と拡張スペース EX を作るを考える。基礎スペース F には P が書き込まれ、拡張スペース EX には P および Q が書き込まれる。このとき、マッチングと呼ばれる操作 (43) が適用される。

(43) マッチング: F がターゲットスペース T にマッチする (= T が F の情報をすべて含む) ならば、 EX の情報を T に書き込み¹³⁾。

これと 3.1 節で述べた坂原 (1985) の分析を統合すると、条件文の解釈スキーマとして (44) が導き出される。

(44) $S_i P, Q$. (P ならば Q だ。)



B: 基底スペース

F: 基礎スペース

EX: 拡張スペース

E: 命題集合

CEC: 因果コネクタ (Fauconnier & Turner 2002)

$CEC(E) = F-EX$ (E は $F-EX$ の原因)¹⁴⁾

$IC(E) = E'$, $IC(E') = E''$, $IC(P) = P'$ ¹⁵⁾

13) ターゲットスペースとは文脈中で問題となっている何らかの状況を指す。(43) は命題論理において $p \rightarrow q$ と p から q を導出する推論規則 (肯定式) をメンタル・スペース理論の枠組みで述べ直したものである。

14) 坂原 (1985: 88): 「[...] q の十分条件を構成する命題の集合を E_0 とおく。さ

3.2.2 結論 (i)

前節で提示したスキーマを用いると、結論 (i) は次のようにして導き出すことができる。

(45) a. 発話される条件文： S'il fait beau demain, Pierre passera à la maison.

(明日晴れたらピエールが来る。)

b. 文脈情報 1 : Si Pierre passe à la maison demain, je lui ferai le gâteau qu'il aime.

(ピエールが来たら、好物のケーキを作ってやろう。)

c. 文脈情報 2 : Si je veux lui faire le gâteau qu'il aime demain, il faut que j'aille faire des courses aujourd'hui.

(ケーキを明日作るためには、今日食材の買い物に行く必要がある。)

d. 文脈情報 3 : Il fera beau demain. (明日は晴れる。)

e. 結論 : Je vais aller faire des courses aujourd'hui. (今日食材の買い物に行く。)

(46) a. 発話される条件文： F1 : P (明日晴れる)

らに、 E_0 から p を除いた集合を E_1 とする。 E_1 は、条件文「 p ならば q 」の発話において、既に成立しているとみなされる命題の集合である。」

この箇所は、 E_0 に含まれるすべての命題が成立していなければならないように読めるが、 E_0 のすべての要素が q の必要条件であるわけではないので、明らかにその必要はない。本論文の E は、 $p \rightarrow q$ の原因をなす命題集合のうち、基底スペースで実際に成り立っている命題の集合であるから、 $E \cup \{p\}$ が q の十分条件をなすことは確かであるが、 $E \cup \{p\}$ は q の十分条件をなす集合、すなわち坂原のいう E_0 の部分集合である。

15) IC : 同一性コネクター。表記が煩雑になるので、図中では IC をすべて省略してある。ここでは IC が命題どうしを結合しているが、命題どうしを結合する IC は次のように解釈されるものとする。

二つの命題 $\phi = F(x, y, \dots)$ と $\psi = G(x', y', \dots)$ に関して、

$IC(\phi) = \psi \Leftrightarrow IC(x) = x', IC(y) = y', \dots$ で、 G は F とただかたか時制のみが異なる述語。

EX1 : Q (明日ピエールが来る)

b. 文脈情報 1 : F2 : Q (明日ピエールが来る)

EX2 : S (明日ケーキを作る)

c. 文脈情報 2 : F3 : S (明日ケーキを作る)

EX3 : U (1日前に買い物に行く)

d. 文脈情報 3 : T¹⁶⁾ : P

e. 結論 : (46a) と (46d) から, F1 と T のマッチングにより, T : Q

T : Q と (46b) から, F2 と T のマッチングにより, T : S

T : S と (46c) から, F3 と T のマッチングにより, T : U¹⁷⁾

ゆえに, 今日買い物に行く。

この推論は三つの文脈情報に依存しているため, 話者が結論 (i) にコミットするのはそれらの文脈情報が与えられている場合に限られる。

3.2.3 結論 (ii)

喜田 (1999, 2000) の言うように, Si P, Q の結論 (ii) には事態 Q の望ましさが関係する¹⁸⁾。Dinsmore (1991) はある事態に対する望ましさを表す文が条件文として分析できることを指摘している。それによると, (47a-48a) は (47b-48b) の条件文として分析される。

(47) a. Il est souhaitable que ϕ . (ϕ であることが望ましい。)

b. Si ϕ , c'est bien. (ϕ ならば, それはよいことである。)

16) T : ターゲットスペース。ここでは基底スペース B に対する未来 (明日) スペース。

17) T は B に対して明日であり, U は「1日前に買い物に行く」という命題を表すので, T : U とは「明日の時点で「1日前に買い物に行く」が真である」すなわち, 「今日買い物に行く」が真である」という内容を表すことになる。

18) Fujii (2004) も同様のことを述べている。Fujii (2004 : 133) は, 「英語は, 何回も何回も繰り返し練習しないと身につかない」といった発話を持つ「何回も何回も繰り返し練習しないといけない」という義務の意味は語用論的含意であり, この含意は「英語が身につかない」という命題が否定的に評価されている文脈でしか生じないと述べている。

- (48) a. Il n'est pas souhaitable que ϕ (ϕ であることは望ましくない。)
 b. Si ϕ , ce n'est pas bien. (ϕ ならば、それはよくないことである。)
- この考え方をを用いると、結論(ii)は次のようにして導き出すことができる¹⁹⁾。
- (49) a. 発話される条件文： Si tu travailles, tu l'auras. (勉強すれば受かる。)
 b. 文脈情報： Il est souhaitable que tu l'aies. = Si tu l'as, c'est bien.
 (受かることが望ましい。=受かるならば、それはよいことである。)
 c. 結論： Si tu travailles, c'est bien. = Il est souhaitable que tu travailles.
 (勉強するならば、それはよいことである。=勉強することが望ましい。)
- (50) a. 発話される条件文： F1 : P (勉強する)
 EX1 : Q (受かる)
 b. 文脈情報： F2 : Q (受かる)
 EX2 : S (これはよいことである)²⁰⁾
 c. 結論： (50a) と (50b) の連言は、次のマッチング条件と等価である。
 F3 : P (勉強する)
 EX3 : S (これはよいことである)
 ゆえに、勉強することが望ましい。
- (51) a. 発話される条件文： Si elle rentre tard, elle sera punie.
 (遅く帰ればお仕置きされる。)
 b. 文脈情報： Il n'est pas souhaitable qu'elle soit punie.
 = Si elle est punie, ce n'est pas bien.
 (お仕置きされることは望ましくない。=お仕置きされるならば、それはよくないことである。)
 c. 結論： Si elle rentre tard, ce n'est pas bien.
 = Il n'est pas souhaitable qu'elle rentre tard.
 (遅く帰るならば、それはよくないことである。=遅く帰ることは望ま

19) これは次の推移法則に基づく推論である。前提 1: $p \rightarrow q$ 前提 2: $q \rightarrow s$ 結論: $p \rightarrow s$

20) 代名詞 ce (「これ」) はそれを含む文が書き込まれるスペースに対する自己言及として解釈されるものとする。

しくない。)

(52) a. 発話される条件文: F1 : P (遅く帰る)

EX1 : Q (お仕置きされる)

b. 文脈情報: F2 : Q (お仕置きされる)

EX2 : $\neg S$ (これはよくないことである)

c. 結論: (52a) と (52b) の連言は、次のマッチング条件と等価である。

F3 : P (遅く帰る)

EX3 : $\neg S$ (これはよくないことである)

ゆえに、遅く帰ることは望ましくない。

この推論は文脈情報に依存しているため、話者が結論 (ii) にコミットするのはその文脈情報が与えられている場合に限られる。

3.2.4 結論 (iii)

結論 (iii) は条件文の解釈スキーマ (44) の命題集合 E に含まれる命題であり、条件文から結論 (iii) を導く推論は結果 (53a-54a) から原因 (53b-54b) を導く推論と同じものである。これを条件文の「要約」と考えるのは因果律の誤謬 (cf. Fauconnier & Turner 2002) である。

(53) a. J'arrête pas d'éternuer. (くしゃみが止まらない。)

b. Donc je suis allergique aux pollens. (ゆえに、花粉症だ。)

(54) a. Elle me téléphone tous les soirs. (彼女が毎晩電話をかけてくる。)

b. Donc elle m'aime. (ゆえに、彼女は私のことが好きだ。)

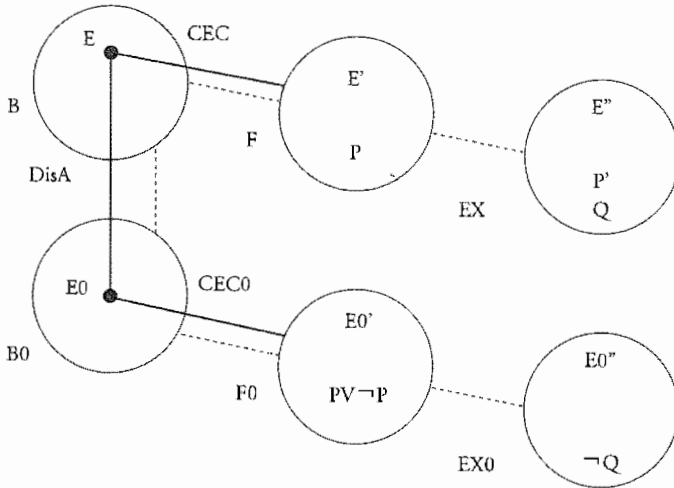
結論 (iii) は結論 (i-ii) と異なり条件文の原因であるから、結論 (iii) のみが Pourquoi? (「なぜ?」) に対する答えとなる。分析的条件文 (e.g. Si tu dessines un chat, tu dessines un mammifère. 「猫を描けば、哺乳類を描いたことになる。」) においては E は空集合であるから、分析的条件文に結論 (iii) は存在しない。これに対して、総合的条件文 (= 分析的でない、通常条件文) の成立にとって E は必要不可欠であるから、E に何が属するかを議論することはできても、E の存在そのものを却下することはできない。したがって、話者は結論 (iii) に常にコミットすることになる。

3.3 譲歩文

3.3.1 譲歩文の解釈スキーマ

3.1 節の坂原 (1985) の考え方を踏まえると、譲歩節の解釈スキーマは次のようになる。

(55) Même si P, $\neg Q$ (parce que R).²¹⁾ ((R だから) P でも $\neg Q$ だ。)



B: 前提基底スペース

F: 前提基礎スペース

EX: 前提拡張スペース

E: 命題集合

$\neg R \in E0$

CEC: 因果コネクター

$CEC(E) = F-EX$ (E は F-EX の原因)

B: 断定基底スペース = 現実に対応

F: 断定基礎スペース

EX: 断定拡張スペース

E0: 命題集合

$R \in E0$

DisA: 非類推 (Disanalogy) コネクター (F & T 2002)

$DisA(E) = E0$ (E0 は E と両立不可能な命題の集合)²²⁾

CEC0: 因果コネクター

$CEC0(E0) = F0-EX0$ (E0 は F0-EX0 の原因)

F0 に (F と異なり) P ではなく恒真式 $PV \neg P$ が書き込まれる理由を説明してお

く。前提により、F0に含まれるPはQに有利な条件であるから、これは、Pの成立の有無にかかわらず、E0が $\neg Q$ の原因であるということに等しい。したがって、F0ではPの成立の有無を指定しないのが適切である。また、スペース最適化により、BとB0は最大限類似していると仮定されるから、RのみがE0の要素であると仮定される。ゆえに、デフォルトでは、Rのみが $\neg Q$ の原因であると推論される。

3.3.2 結論 (i)'

譲歩文の結論 (i)'は次のようにして導かれる。

(56) a. 発話される譲歩文：Même s'il fait beau demain, Pierre ne passera pas à la maison.

(明日晴れてもピエールは来ない。)

b. 文脈情報 1：Si Pierre passe à la maison demain, je lui ferai le gâteau qu'il aime.

(明日ピエールが来たら、好物のケーキを作ってやろう。)

c. 文脈情報 2：Si je veux lui faire le gâteau qu'il aime demain, il faut que j'aille faire des courses aujourd'hui.

(ケーキを明日作るためには、今日食材の買い物に行く必要がある。)

d. 文脈情報 3：Pierre a du travail demain.

(ピエールは明日仕事がある。)

e. 結論：Ce n'est pas la peine que j'aille faire des courses aujourd'hui.

(57) a. 発話される譲歩文：B : E

F1 : P&E' (明日晴れ, かつ E')

EX1 : Q (明日ピエールが来る)

21) 同一性コネクターに関する条件式は一切省略してある。

22) Fauconnier & Turner (2002) 流の言い方をすれば、B0はBに対して反事実的である。

B0 : E0 (現実に成立している命題)

F10 : $(PV \neg P) \& E0'$ (E0'が成り立つ)²³⁾

EX10 : $\neg Q$ (明日ビエールは来ない)

b. 文脈情報 1 : F2 : Q (明日ビエールが来る)

EX2 : S (明日ケーキを作る)

c. 文脈情報 2 : F3 : S (明日ケーキを作る)

EX3 : U (1日前に買い物に行く)

d. 文脈情報 3 : T : 「ビエールは仕事がある」 $\in E0'$

e. 結論 : (57a) と (57d) から, F10 と T のマッチングにより, $T : \neg Q$

$T : \neg Q$ と (57b) から, $T : \diamond S \& \diamond \neg S$ ²⁴⁾

$T : \diamond S \& \diamond \neg S$ と (57c) から, $T : \diamond U \& \diamond \neg U$

ゆえに, 今日買い物に行くかどうかは自由である。

3.3.3 結論 (ii)'

譲歩文の結論 (ii)'は, Pであっても $\neg P$ であっても同じ結論 $\neg Q$ が成立することから, Pの真偽はどちらでもよい ($\diamond P \& \diamond \neg P$) と結論する推論であり, 文脈情報に応じて二通りの場合がある。一般に, Pが労力を要するものであれば, *Ce n'est pas la peine que P* 「Pである必要はない」 (= *C'est possible que $\neg P$* 「 $\neg P$ が可能である」) が結論となり, $\neg P$ が労力を要するものであれば, *Ce n'est pas la peine que $\neg P$* 「 $\neg P$ である必要はない」 (= *C'est possible que P* 「Pが可能である」) が結論となる。

(58) a. 発話される譲歩文 : *Même si tu travailles, tu ne l'auras pas.*

(勉強しても受からないだろう。)

23) 以下で示されるように, ここでは文脈情報3「ビエールは仕事がある」がE0'に含まれる。

24) \diamond は可能性演算子。一般に, $M : \diamond \phi$ は, 命題 ϕ がスペースMに書き込まれてもスペース構成の整合性に問題が生じないことを意味するものとする。したがって, $T : \diamond S \& \diamond \neg S$ は, スペースTにSが書き込まれても $\neg S$ が書き込まれても, スペース構成の整合性に問題が生じないことを意味する。

- e. 文脈情報: Il t'est pénible de travailler. (勉強するのは大変だ。)
 f. 結論: Ce n'est pas la peine que tu travailles. (勉強する必要はない。)

(59) a. 発話される譲歩文: B : E

F1 : P&E' (勉強し, かつ E')

EX1 : Q (受かる)

B0 : E0 (現実に成立している命題)

F10 : (PV \neg P) &cE0' (E0'が成り立つ)²⁵⁾EX10 : \neg Q (受からない)

b. 文脈情報: T : E0'

c. (59a-b) から, TとF10のマッピングにより, T : \neg Qd. (59a-c) から, T : \diamond P & \diamond \neg P

ゆえに, 勉強してもしなくてもよい。

e. 文脈情報: T : Pは労力を要する

f. (59d-e) に基づく語用論的推論による結論:

T : Ce n'est pas la peine que P. = C'est possible que \neg P.

ゆえに, 無理に勉強する必要はない。

(60) a. 発話される譲歩文: Même si elle rentre tard, elle ne sera pas punie.

(遅く帰ってもお仕置きされない。)

e. 文脈情報: Il lui est pénible de rentrer tôt. (早く帰るのは大変だ。)

f. 結論: Elle peut rentrer tard. (遅く帰ってよい。)

(61) a. 発話される譲歩文: B : E

F1 : P&E' (遅く帰り, かつ E')

EX1 : Q (お仕置きされる)

B0 : E0 (現実に成立している命題)

F10 : (PV \neg P) &cE0' (E0'が成り立つ)²⁶⁾EX10 : \neg Q (お仕置きされない)25) 例えば, 「君は頭が悪い」 \in E0'などが考えられる。26) 例えば, 「彼女の親は甘い」 \in E0'などが考えられる。

b. 文脈情報：T : E0'

c. (61a-b) から, T と F10 のマッチングにより, : T : $\neg Q$

d. (61a-c) から, T : $\diamond P \& \diamond \neg P$

ゆえに, 遅く帰っても遅く帰らなくてもよい。

e. 文脈情報：T : $\neg P$ (=遅く帰らない=早く帰る) は労力を要する

f. (61d-e) に基づく語用論的推論による結論：

T : Ce n'est pas la peine que $\neg P$. = C'est possible que P

ゆえに, 無理に遅く帰らない (=早く帰る) 必要はない。=遅く帰ってよい。

3.3.4 結論 (iii)'

最後に, 譲歩文の結論 (iii)'は, 譲歩文の解釈スキーマ (55) における命題集合 E0 に含まれる命題であり, 条件文の結論 (iii) と全く同様の推論によって得られる。ただし, E0 は E の要素の否定命題の集合であるから, 譲歩文 *Même si P*, $\neg Q$ の結論 (iii)'は必ず条件文 *Si P*, *Q* の結論 (iii) の否定命題になる。

(62) a. *Si je bois du lait, je suis malade.* (牛乳を飲むと気分が悪くなる。)

b. *Je suis allergique au lait.* [結論 (iii)] (牛乳アレルギーだ。)

(63) a. *Même si je bois du lait, je ne suis pas malade.*

(牛乳を飲んでも気分が悪くならない。)

b. *Je ne suis pas allergique au lait.* [結論 (iii)'] (牛乳アレルギーではない。)

(64) a. *Si tu travailles assez, tu l'auras.* (君は勉強すれば受かる。)

b. *Tu es intelligent.* [結論 (iii)] (君は頭がいい。)

c. *Cet examen est facile.* [結論 (iii)] (その試験は簡単だ。)

(65) a. *Même si tu travailles, tu ne l'auras pas.*

b. *Tu n'es pas intelligent.* [結論 (iii)'] (君は頭がよくない。)

c. *Cet examen est difficile.* [結論 (iii)] (その試験は難しい。)

譲歩文の成立にとって E0 は必要不可欠であるから, E0 に何が属するかを議論することはできても, E0 の存在そのものを却下することはできない。このた

め、話者は必ず何らかの結論 (iii)'にコミットすることになる。また、分析的条件文 (66a) においては E は空集合であるから、E に含まれる命題の否定命題の集合である (= E と DisA で結合された) E0 を作ることは原理上不可能である。このため、分析的条件文 (66a) には対応する譲歩文 (66b) が存在しない。

(66) a. Si tu dessines un chat, tu dessines un mammifère.

(猫を描けば、哺乳類を描いたことになる。)

b. #Même si tu dessines un chat, tu ne dessines pas un mammifère.

(猫を描いても、哺乳類を描いたことにはならない。)

4. 結論

以上の議論から次のことが言える。条件文が結論 (i-iii) と結び付けられるという喜田 (1999, 2000) の観察自体は妥当であるが、これを条件文の定義とする喜田の分析は不適切であり、言語学的にはむしろ結論 (i-iii)こそ説明の対象とされるべきである。これには大きく三つの理由がある。第一に、結論 (i-iii) は等質的なクラスをなしておらず、結論 (i-ii) と結論 (iii) とでは性質が異なる。第二に、条件文が三つの結論 (i-iii) を持つことは偶然とは考えられず、条件文は個別言語の枠を超えてこの三つの結論を持つと考えられる。第三に、譲歩文において条件文の結論 (i-iii) と類似した結論 (i'-iii') が観察されるが、これが条件文の結論 (i-iii) と全く独立に与えられているとは考えられない。ところが、喜田のアプローチは結論 (i-iii) および結論 (i'-iii') を説明の対象とすることを許さないため、両者の関連を捉えることができない。以上のことから、喜田の分析は言語学的に説明されるべき言語事実に説明を与えることを原理上不可能にするものであり、意味表示レベルを持つ意味理論を却下する根拠とはならない。

条件文の結論 (i-iii) の性質およびそれらと譲歩文の結論 (i'-iii') との関係を示すためには、条件文の内容と言語外文脈情報とが書き込まれる意味表示が不可欠である。本論文の分析によると、結論 (i-ii) および結論 (i'-ii) は

条件文・譲歩文の発話内容と文脈情報に基づいた演算により得られる命題であり、結論 (iii) および結論 (iii') は条件文・譲歩文の原因命題である。喜田は結論 (iii) を条件文の要約と考えているが、これは原因と結果を取り違える因果律の誤謬に陥っていると言える。結論 (iii) および結論 (iii') をそれぞれ条件文と譲歩文の成立を支える原因命題と考えることで、両者が互いに否定の関係にあることも説明できる。この観点からすれば、2.1 節で挙げたフロイトの例 (6) に見られるずれば、二人の対話者の推論のずれと考えれば十分であり、論証概念を導入しない限り説明できない性質のものではない。

以上の考察により、条件文と譲歩文の分析に関して、言語内論証理論によるアプローチよりも、意味表示に基づくアプローチの方が優れていることが示された。

付記

本研究は平成 18 ～ 20 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費，課題番号 18・5930）の助成を受けている。

参考文献

- Anscombre, Jean-Claude. & Oswald Ducrot. (1983) : *L'argumentation dans la langue*, Bruxelles : Mardaga.
- Dinsmore, John. (1991) : *Partitioned Representations*, Dordrecht: Kluwer.
- Fauconnier, Gilles. (1984) : *Espaces mentaux : Aspects de la construction du sens dans les langues naturelles*, Paris : Minuit. 坂原茂他訳『メンタル・スペース』白水社, 1996年。
- Fauconnier, Gilles. (1997) : *Mappings in thought and language*, Cambridge: Cambridge University Press, 坂原茂, 田窪行則, 三藤博 訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店, 2000年。
- Fauconnier, Gilles. & Mark Turner. (2002) : *The way we think: Conceptual blending and the Mind's hidden complexities*, Basic Books.
- Fujii, Seiko. (2004) : Lexically (un) filled constructional schemes and construction types: The case of Japanese modal conditional constructions, Miryam Fried & Jan-Ola Östman (eds.) *Construction Grammar in a Cross-Language Perspective* (Constructional Approaches to Language Series Vol. 2.).

- Sakai, Tomohiro. (2006) : 《À propos de la valeur argumentative des conditionnelles : critique de la théorie de l'argumentation dans la langue 》『明星大学日本文化学部言語文化学科研究紀要』第 14 号: pp. 127-139。
- 大久保 朝憲 (2000) : 「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文学論集』(関西大学) 第 49 巻 4 号 : pp. 23-40。
- 喜田 浩平 (1999) : 「条件文の意味と使用」『仏文研究』(京都大学フランス語フランス文学研究会) XXX: 1-18。
- 喜田 浩平 (2000) : 「si と même の意味論的結合関係」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 第 34 号: pp. 27-38。
- 坂原 茂 (1985) : 『日常言語の推論』, 東京大学出版会。